

教員・保育者養成につなぐ民俗芸能の伝承過程

—宮崎の夜神楽、太鼓踊から—

佐々木 昌代・眞崎 雅子

The Lore of Japanese Folk Performing Art in Process for Teachers Training in Kindergarten and Childcare

—Yokagura and Taiko-Dances in Miyazaki Prefecture—

Masayo SASAKI and Masako MASAKI

1. はじめに

宮崎県の夜神楽、太鼓踊を中心に、伝承過程に着目して、過疎高齢化の波によって衰退の危機にある民俗芸能の伝承地域ごとの現況を調査し、未来に向けた伝承継続の課題を舞踊教育、身体運動文化論の立場から探求してきた。

民俗芸能の伝承過程には、夜神楽であれば祝子^{ほうり}、法者^{ほしゅ}、太鼓踊であれば太鼓打^{たいこうち}（踊り子）、鉦打^{かねうち}などと呼ばれる後継者を育成する巧みな仕組みが仕掛けられていて、伝承地域の後継者を育む仕組みともなっている。例えば、小学校体育（表現運動）や保育内容表現（身体表現）にかかわる授業で、民俗芸能を取り上げる際、受講する学生の興味・関心を湧かせるために、高千穂町教育委員会が制作した夜神楽の解説ビデオ、NHKが放映した椎葉神楽^{しいば}や銀鏡神楽^{しろがみ}、石野田白太鼓踊^{いしのどうすだいこどり}に関する特集番組を観せると、学生達からは異口同音に“神様は地域の人々が互いに仲良くして地域を守るために祭（夜神楽や太鼓踊）を創った”といった感想が聞かれる。まさしく、夜神楽であれ、太鼓踊であれ、民俗芸能は伝承地域の人々の絆を深め、伝承地域の将来の担い手を育てる社会装置である。

これまで、神の御業とも見える後継者を育成する社会装置としての民俗芸能について、子どもから高齢者に至る多様な世代が伝承地域に満ちていてこそ活性化するシステムであることを強調して、そのシステムが過疎高齢化の進捗する伝承地域であっても機能し得るための方途について探り、論じてきた。同時に、小学校教員養成課程の体育科指導法（表現運動）、保育者養成課程の表現指導法（身体表現）などの授業において、夜神楽や太鼓踊を教材として取り入れることにも努力してきた。しかしながら、教員・保育者養成課程に、如何なる意図をもって、民俗芸能の何をどのように取り入れるべきであるのか、について熟慮したり、共同研究者間で論議したりすることはしてこなかった。

そこで、本稿では、先ず、教育・保育現場で民俗芸能がどのように取り扱われるべきかについて、学習指導要領および幼稚園教育要領等の方向性を概観し、次いで、研究者が報告している保育・教育現場での民俗芸能の導入事例から、その意義について検討し、そして、これまでの宮崎の夜神楽や太鼓踊の伝承過程の調査を振り返ることから、教員・保育者養成課程における民俗芸能の活用のあり方について考察していきたい。

2. 学習指導要領および幼稚園教育要領等における「伝統や文化」

学習指導要領および幼稚園教育要領等に見られる「伝統や文化」に関する記述の変遷を辿ってみる。平成10年6月の中央教育審議会答申では、子どもに対する学校教育の役割として、「我が国の文化と伝統の価値について理解を深め、未来を拓く心の育成」が求められ、教員に対しても自ら伝統文化の学習に積極的に参加する必要性が示された。また、幼児期の子どもについては、自然との触れ合いや高齢者など幅広い世代との交流による直接体験の減少が指摘され、幼稚園・保育所に対して「地域の行事に参加する活動」や「高齢者と触れ合う活動」などの積極的な取り組みが要請された。

同年、学習指導要領の改訂により「総合的な学習の時間」が創設される。この時点では「総合的な学習の時間」は、各学校の裁量において取り扱われることとされたが、その後、平成20年の改訂で「伝統と文化」に関する学習内容の一層の充実が図られることとなり、「総合的な学習の時間」の例示として「地域の伝統や文化に関する学習活動の実施」が記載された。また、道徳をはじめ、「伝統と文化」に慣れ親しむ活動が各教科と関連して実施されるよう強調された。

体育科においては、表現運動の目標に「踊りを通して日本のいろいろな地域や世界の文化に触れるようにする」(第5・6学年)と示された。そしてこの度、平成29年の改訂により「伝統や文化に関する教育の充実」がさらに重要視され、我が国や郷土の音楽、和楽器、武道、和食や和服などに対する愛着を深められるよう、各教科における具体的な指導が求められている。

幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領においても、平成29年の改訂(定)では、領域「環境」(保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領は3歳以上)の内容として「日常生活の中で、我が国や地域社会における様々な文化や伝統に親しむ」が加わり、内容の取扱いとして文化や伝統に親しむ際には「正月や節句など我が国の伝統的な行事、国歌、唱歌、わらべうたや我が国の伝統的な遊びに親しんだり、異なる文化に触れる活動に親しんだりすること」を通じてなされることが初めて明示された。

このように、教育・保育現場における「伝統と文化」に関する学習の必要性は、時代とともに高まってきた。その背景にあるのは、急速な少子高齢化や過疎化の問題である。人間関係の希薄化や地域存続の危機などが挙げられる。すなわち、地域社会の再生を図るための最重要課題として、地域のアイデンティティや絆の形成につながる伝統文化の尊重や、民俗芸能の継承および後継者育成の推進に大きな期待が寄せられているのである。

3. 教育・保育現場における民俗芸能の導入とその意義

柏木利恵子は、岩手県遠野市にある青笹小・中学校において、1966年から、同市に伝わる民俗芸能「しし踊り」を体育授業の教材としてカリキュラムに取り入れ、実施したことを報告している。その成果については、学校教育における民俗芸能の導入意義として、地域の伝統文化に対する理解や尊重、礼儀作法の習得を挙げている。

卯田卓也は、岩手県内で1970年頃から始まった小学校における民俗芸能の導入は、その後創設された「総合的な学習の時間」によって各地で進み、2000年の調査時には導入校は県内全体の約65%に上ったと報告している。導入対象の民俗芸能は盆踊り、剣舞、しし踊り、田植踊りなどで、保存会の指導により運動会や発表会などで披露されていること、同県の過疎化が進行した地域では、学校での伝承活動が民俗芸能の後継者育成に重要な役割を果たしていることも述べている。

森下春枝は、子どもの心と身体を育てるアプローチとして、幼少期における民俗芸能の活用

の有効性について、いくつかの事例を踏まえて報告している。その1つ目は、平成21年9月に日本におけるユネスコ無形文化遺産として登録された「早池峰神楽」の保育園における導入事例である。「早池峰神楽」の演目から保育園児でも取り組める「神楽」を選び、保存会の指導を受けて練習を行い、1歳～5歳の子ども全員が園長や保育者とともに運動会で披露している。2つ目は、秋田県の国指定重要無形民俗文化財「西馬音内盆踊り」の保育園における導入事例である。昭和60年頃から、子どもの情操教育と踊り手の育成を目的として実施されている。保存会の指導を受け、3歳以上の子ども達が夏祭りや敬老会で披露している。最後は、静岡県浜松市北区滝沢町に伝わる民俗芸能「滝沢の放歌踊り」の滝沢小学校における導入事例が取り上げられている。昭和48年、当時の滝沢小学校々長が中心となり、保存会の協力を得て始まった取り組みである。30年以上継承されたが、平成17年に、児童数減少を理由に近隣の都田小学校への統合が決まり、「滝沢の放歌踊り」存続の危機を迎えた。伝承地域の人々が結集し、伝承地域ではない地域で放歌踊りを存続させるための解決策を模索した結果、都田小学校のクラブ活動として引き継がれた。森下は、元滝沢小学校々長をはじめ、放歌踊りの継承に努めた保存会、PTA、地域の人々の話を聞き「踊ることで身につくこと」としてまとめている。以下にその要旨を記述する。

- ・「滝沢の放歌踊り」は、振り、道具の操作、楽器の演奏、歌詞や節の記憶、これらが身につくについてはじめて、放歌踊りを演じることができる。
- ・地域に伝わる芸能に自然な形で触れることで、難しいと思われる動作も自然に身につく、幼少期の基礎的で多様な動きを獲得する。
- ・太鼓などの楽器を抱えたまま様々な動きを伴うため、総合的に巧みな身のこなしが可能となり、ステップ動作やリズム感がよくなる。
- ・保存会の指導を受けるなど、外部の人達との接触・交流ができる。
- ・皆と力を合わせることの重要性和、互いに教え合うことで、上級生を尊敬し下級生を指導する責任感が生まれることから、人間の上下関係を学べる。
- ・学校を中心とした地域ぐるみの取り組みとなるため、伝承活動が円滑に行われ、後継者育成にもつながる。練習は自宅でも行われるため、幼少期から自然に親しめる。

これまで、教育・保育現場における民俗芸能の導入事例について、その成果や影響とともに紹介してきた。以下に、研究者らの報告をもとに、民俗芸能の導入意義をまとめる。

- ・子どもの運動能力を多面的に発達させる。
リズム感や多様な動きの獲得、歌や音と同調できる身のこなし（身体感覚）の育成など
- ・子どもの表現力を養い、社会性を育む。
自己表現する喜び、自尊心や自己肯定感の高揚、練習仲間との触れ合いや教え合いを通じた社会生活のルールやマナーの学びなど
- ・民俗芸能の後継者を育成する。
民俗芸能の理解、民俗芸能の技能の習得、民俗芸能の後継者としての自覚の芽生え、地域への貢献意識の芽生えなど
- ・子どもの地域への愛着を形成する。
地域の民俗芸能への興味・関心の高まり、日本の伝統文化への理解、地域の文化や自然な

- どへの愛着の形成など
- ・ 地域社会を活性化する。
子どもの活動を中心に、学校（保育所などの児童福祉施設も含む）、保護者、民俗芸能の保存会をはじめとする地域の人々をも巻き込む地域一体となった取り組みによる地域住民の連携や相互支援の再生など



もうすぐ出番「子ども神楽」(嶽之枝尾神楽)

4. 習いのルールを活用する

民俗芸能の伝承過程に、伝承内容と等しく、探求すべき豊かさがあることに最初に気づかされたのは宮崎県西都市に伝承されている銀鏡神楽であった。銀鏡神楽は、全国的にも知られた夜神楽で、国の重要無形民俗文化財として単独指定^{*1}されている。米良山中の夜神楽に共通した特徴である「神体具現」の形式を持ち、徹宵で執行される33番の演目に厳格な「格付け」がなされている。祝子（後継者）の主体性が重んじられ、自ら願い出て夜神楽の舞と楽（太鼓、笛、楽打ち、手拍子）を身に付けていくことを企図して、稽古の場は「習い」と呼ばれる。毎年の夜神楽ごとに自分が「手割」されて舞う演目の格付けが上がることを目指して、祝子が意欲的に、ときには互いに競い合いながら、習いを重ねて舞や楽の技量を磨いて成長できるように、銀鏡神楽では「格付け」と「手割」が後継者育成の仕組みとして機能している^{*2}。

習いは、以前は銀鏡神社宮司宅・社務所に隣接する花屋と通称される遙拝所で行われていたが、現在は地域住民の希望と寄付金によって建てられた伝承館で行われている。伝承過程である習いでは、後継者育成の仕組みが巧みに機能しているとともに、伝承現場としての秩序を維持する礼儀作法も機能している。

稽古場である花屋や伝承館の入口では、履き物をきちんと脱ぎ揃えなければならない。伝承館では靴箱のなかに仕舞い、遙拝所でもある花屋ではつま先を神前に向けて並べる。入室したら、最初に、神棚に対して作法通りに正座して拝礼（二礼二拍手一礼）し、次に、保存会々長、頭取などの役職者に対して正座し、床に手をつけて「こんばんは」「お願いします」と挨拶をする。

さらに、仲間の祝子や筆者のように調査に来ている外来者などへも順に挨拶をして、習いに加わる。大人の祝子は袴の着物と羽織を正しく着用し、舞の稽古中も着装が乱れるとか、どんなに汗をかいていても首にタオルを巻いたまま稽古に臨むなどといった不作法は許されない。

保存会に属する祝子全員が揃って習いに参加することが基本で、そのときの習いに自分が手割されている演目の稽古がなければ、手割されて夜神楽本番で舞うことになっている祝子が中央で稽古するのに合わせて、後方で自主的に習う。稽古は常に全習法で、演目ごとに一通り舞い、舞い終えるごとに師匠である保存会々長、頭取、先輩祝子より手直しを受ける手順で進められる。習いが終わると、当番となっている伝承地域の人々によって夜食、茶と菓子が振る舞われる。遙拝所控えの間に参加者全員が囲炉裏を囲んで座り、夜神楽執行に向けた段取りなどを話し合いながら、夜食として供される猪肉の入った蕎麦などを食するが、座は保存会々長を筆頭に年齢と経験年数の長さによる序列に従って並ぶ。

これら習いの決まり事には、初めて舞を習う小学生は勿論のこと、祖父や父に連れられて稽古を見に来る幼児も、筆者のようにビデオカメラを抱えて調査に来る研究者も、必ず従うことが求められる。銀鏡神楽の習いへ初めて調査に行ったとき、保存会々長であった瀧砂武畷氏と「大学の先生だから先生と呼ぶので、先生と呼ばれるのに相応しい姿で調査すること」を約束した。当時の習いの印象について、以下に、夜神楽の後継者育成の仕組みの報告として初めて書いた拙論から引用する。

銀鏡神楽の習いには、習い手の背筋を自然に正す独特の力と緊張感が醸し出されている。常時、習い手の間に「言われた通りに舞ってみよう」「指摘された通りにあらためてみよう」という素直な気分が窺える。学ぶ側の子どもたちによって教える側の教師が評価や批判に晒されるだけでなく、時には無視されることすらある現代の合理化された学校教育の場から見ると、約束事が張り巡らされ、儀礼化された銀鏡神楽の習いのあり様は、非合理であるがゆえの魅力を持っている。習いの場に立ち会っていると、「神楽をやる子どもは幸せだ」という師匠や頭取の声を聞く。この言葉は、習いがまさに「身の習い」として、子どもた



小・中学生の舞「花の舞」（銀鏡神楽）

ちが学校で学べないものを神楽で習っていることを指している*³。

したがって、教員・保育者養成課程において民俗芸能を活用する際、夜神楽なら舞と楽、太鼓踊なら踊りと太鼓・鉦のリズムといった舞踊や音楽の要素だけを学習材として取り扱うのでは不十分である。伝承現場において大切に保たれている挨拶、身だしなみ、稽古の手續きといった礼儀作法についても、学習態度の領分として片付けないで、必須の学習材として取り扱うべきであると考えられる。

5. 社会装置としての師匠を活用する

宮崎県えびの市飯野に伝承されている麓輪太鼓踊ふもとわだこおどりは、朝鮮の役で「鬼石曼子おにしまず」と恐れられた薩摩の戦国大名島津義弘が国内外の戦いに臨んで戦勝祈願、凱旋祝いに踊らせたことを由来として、胸に小太鼓を据え、背に矢旗を立てた太鼓打、腕を伸ばして重量のある鉦を掲げる鉦打によって勇壮に踊られる。太鼓打が矢旗をはためかせながら円陣を描いてダイナミックに巡回する場面が最大の見せ場であることから、輪太鼓踊と称される。踊り全体を統率する鉦打は入鉦いりがねと呼ばれ、個人技の見せ場がある花形の太鼓打は先太鼓さつでこと呼ばれる。入鉦と先太鼓の地位に就くには、経験を積んで技量を磨き上げるとともに、伝承地域への社会的貢献も示していかなければならないとされる。麓では、鉦打は太鼓打の経験を積んだ熟練者より選ばれるため、入鉦を頂点とする階層構造が輪太鼓踊と伝承地域の後継者を育成する仕組みとして機能している*⁴。

麓輪太鼓踊の調査を始めて間もない平成10年、伝承地域にある宮崎県立飯野高等学校の男子生徒が麓輪太鼓踊を習い、宮崎県高等学校総合文化祭の郷土芸能の部で発表した経緯を取材したことがあった。10月冒頭の本番に向けて、夏前頃から稽古が開始され、当時の保存会々長谷口基義氏を中心に、太鼓打、鉦打としての現役を退いた高校生にとっては祖父世代に相当する保存会メンバー、現役の入鉦担当者が師匠として指導に当たった。常日頃から、谷口会長が「最近の若い者は厳しい稽古をしたのでは集まらないが、厳しい稽古をしなければ踊りが様にならない」と口にされていたので、高校生の心成しかへらへらしているように見える態度や口の利き方が気になった。

しかし、本番の発表では、高校生は見事に変身していた。短い期間で麓輪太鼓踊を習得し、高校生らしい脚力を利かせた踊りを披露した。着物、毛頭、手甲、脚絆、草鞋を身につけ、太鼓を胸に据え、矢旗を背に立てることは踊り子自身ではできない。身長3倍程もある矢旗を背に負っている上体を左右に大きく捻りながら豪快に跳躍する踊りが太鼓打の見せ場であるので、どんなに激しく動いても、背の矢旗も胸の太鼓もズレたり外れたりしないように、経験者が2～3人がかりでしっかり装着しなければならない。師匠達より装着の世話を受ける際、高校生は「師匠」と親しげに呼びかけ、視線を合わせてお願いとお礼の言葉を発し、剣道の上位有段者のごとく背筋をまっすぐに伸ばした姿勢を保っていた。しかも、装着の世話をしながら師匠達が言って聞かせる本番での要領や励ましに、真剣な表情で応じていた。

高校生の師匠となった保存会メンバーは、自分達で獲った猪を焼肉会で馳走して、孫のような高校生と親睦を図るなど、現代の若者に苦言を呈しながらも、やんちゃな高校生を掌握する指導力を発揮した。その指導力は、宮崎県高等学校総合文化祭という晴れ舞台上で太鼓打、鉦打として立派に発表できるまでに高校生の技量を鍛え、世代を超えてコミュニケーションを取ることができる社会性をも引き出した。麓輪太鼓踊が民俗芸能の後継者を鍛え、地域社会の後継者をも育成する社会装置であった証左である。以下に、民俗芸能という社会装置を通過して、

地域コミュニティの中核としても尊敬されている麓輪太鼓踊の師匠達への敬意を籠めて書いた拙稿を引用しておく。

このような重要な役割を任されるには、日頃から輪太鼓踊の技量を高める意欲と責任を示すことは勿論のこと、それ以上に重要なこととして地域社会への深いコミットメントが必要である。その意味では、踊りを通して地域への奉仕と献身の態度が試されているわけであり、輪太鼓踊は、地域への主体性を試すことを企図して仕掛けられた実験装置である。それゆえに、入鉦や先太鼓の地位に就くことは地域の人々の大きな尊敬を集め、彼らにとっても誇りに値することなのである*⁵。

したがって、教員、保育者を目指している学生へ、教育・保育現場における民俗芸能の活用のあり方を挙げる際には、学校や幼稚園へ師匠をゲストティーチャーとして招聘することも薦めるが、自分自身、あるいは子ども達を伴って、伝承の場である保存会において直接、丸ごと教えを乞うことがより有効であると説得したい。そこが、もっとも社会装置としての民俗芸能が巧妙に機能する場だからである。

6. 身に付け方を身に付ける

宮崎県西都市に伝承されている尾八重神楽では、夜神楽本来の形態であったと思われる家単位による伝承が今もって堅持されている。尾八重は、宮崎県内の夜神楽伝承地のなかでも過疎化が進んでいる地域である。伝承地域内の小・中学校が廃校となって久しく、夜神楽は廃校となった尾八重小学校の運動場で執行されている。数年前、宮崎県が口蹄疫禍に襲われ、おびただしい数の家畜が殺処分されたが、極めて貴重な県のブランド「宮崎牛」の種牛が避難した先が尾八重であった。それ程、尾八重の過疎化は昂進している。当然のことながら、夜神楽の後継者確保も厳しい状況にある。特に、筆者が調査を始めた十数年前頃は、限られた数の祝子で夜神楽33番を執行していて、10番以上もの演目を舞って出ずっぱりの祝子もいた*⁶。現在、後継者確保が容易になったとはいかないものの、家単位による伝承である「持ち神楽」の仕組みが奏功して、若い祝子が育っている。

夜神楽の伝承は、選ばれた（祝子



初舞台の舞「花鬼神」（尾八重神楽）

株を所有する) 家系による父子相伝で維持されてきたが、伝承地域の人口減少に伴い、広く後継者を募り、保存会などを結成して集団での後継者育成に転換されてきた。多くの伝承地域が家系から保存会へ伝承の軸足を移していくなか、地域住民や尾八重神楽を支援する人々の組織化を図りつつも、尾八重神楽では父から子、子から孫へ、家ごとに受け継ぐことに拘ってきた。

貴重な種牛の避難先になるほど過疎化した地域では、職を得て、配偶者を見つけ、子どもを産み育てて夜神楽の後継者として育成していくことは酷く困難なことである。しかし、尾八重神楽では家が習いの場であるため、生活の拠点を伝承地域外に定めても、夜神楽の技量を身に付け、磨くことができた。

かつて、尾八重神社宮司の中武貞夫氏が子息の敦夫氏に「手力」の稽古をつける場面を観たことがある。父子ならではの、実に厳しい稽古であった。一通り舞った後、幣と鈴を持った腕を高く掲げる動きを、父である貞夫宮司より「違う」「嘘ばかり」と叱咤されながら、子息の敦夫氏は幾度も、幾度も繰り返した。そのとき、ここまで突き詰めて稽古をするからこそ、尾八重神楽の「持ち神楽」が成り立つと感じた。夜神楽の演目を覚え、父の眼鏡にかなう舞を舞えればよいのではない。演目ごとの舞を確実に身に付けていくことを通して、尾八重神楽の「型」を身に付けていくことこそ、習いの本願なのである。つまりは、尾八重神楽の「型」の身に付け方を身に付けていくということである。そうやってこそ、自分の子どもに対して、父として習いの場を持たせることができる。

このことは、保育において子どもが生活習慣を獲得していくプロセスに等しい。生活習慣の獲得においては、一つ一つ確実に獲得していくには生活習慣を実行する技能も必要であるため、繰り返し行うことが求められるが、その繰り返しの過程において子ども自身が試行錯誤していくことを保育者が重視することと同じであるということである。ある生活習慣が身に付くという獲得の結果だけを求めて子どもに対応していったのでは、一つの生活習慣の獲得はよいとしても、その獲得の過程において試行錯誤しながら学んだことを以降の生活習慣の獲得に生かせない。子どもが上手にできたら認め、できなかつたり分からなかつたりしていたら保育者が一緒にやってみることで、獲得の仕方を獲得できるように導いていくのである。保育に限ったことではない。教育においても同様であろう。学び方を学んで、所謂、身体技法(身の習い)を身に付けるということである。教育の過程、保育の過程を大事にしながら子どもを育てるということについて、民俗芸能の伝承過程の解説から、教員、保育者を目指している学生の理解を促していきたい。

7. まとめ

夜神楽や太鼓踊の調査に巡りながら、舞踊教育学を専攻する者として心から希望していることは、夜神楽や太鼓踊を観る眼識を養い、伝承地域ごとの「型」を掴むことである。そのために、伝承過程に着目して、調査を継続してきた。例えば、銀鏡神楽の習いの場では、夜神楽本番に向けて演目を一通り舞った後、師匠である武蔵会長や武頭取がどのような手直しを指摘し、どのような手本を舞って範を示されるかを筆者なりに予測して、その予測が少しずつ外れなくなることを楽しみながら調査を重ねてきた。できるならば、そのような楽しみを保育表現技術(身体表現)の授業などにおいて、受講生に対して生かしていきたいものであるが、実際には難しい。どうしても、舞や踊りのみを教材として、日本の伝統的な舞踊の体験としたり、創作ダンスのモチーフとしたりするのに止まってしまう。

そこで、夜神楽の後継者育成の仕組みについて調査を進める共同研究者として、互いの共通

理解も深めながら、民俗芸能をどのように小学校の体育や保育の表現にかかわる授業で活用すべきかについて、次の手順によって論議・考察した。

はじめに、学習指導要領および幼稚園教育要領等の変遷を概観し、教育・保育現場においては、人間関係の希薄化や地域存続の危機を背景に、地域社会の再生を図る「伝統と文化」学習の必要性が年々高まってきていることを確認した。次に、教育・保育現場への民俗芸能の導入の意義としては、「子どもの運動能力の多面的な発達」「子どもの表現力、社会性の育ち」「民俗芸能の後継者としての自覚の芽生え」「子どもの地域への愛着形成」「地域社会の活性化」などであることを研究者らの報告をもとにまとめた。最後に、宮崎の夜神楽、太鼓踊の伝承過程のエピソードから、教育・保育現場における民俗芸能の活用のあり方を考察した。

結論として、伝承過程に着目して民俗芸能の調査・研究を継続している者としては、研究者らが教育・保育現場における民俗芸能の導入事例から提起している導入の意義に、民俗芸能の後継者育成の仕組みを継承することを加えたい。後継者育成の仕組みは、民俗芸能の舞い手や踊り手を育てるだけではない、伝承地域の将来の担い手をも育てるもので、地域独自の人材育成システムにほかならない。このシステムは、地域の文化であり、地域が継承すべき伝統である。銀鏡神楽の習いのような民俗芸能の伝承場面である人材育成システムが機能している場に立ち会うと、その巧みに驚き、このような場を失くしてはならないと切実に思われる。教員・保育者養成課程においても活用したいし、活用すべきシステムである。そのためには、具体的な教育・保育現場の実践事例をさらに収集・検討するとともに、筆者ら自身が教育・保育者養成課程において指導計画を作成、実践したことを提示しなければならない。今後の研究課題として、実行に努めていきたい。

謝辞

写真家生田浩氏には、本稿への写真提供を快くご承諾いただき、掲載のために調整まで施していただきました。心から感謝申し上げます。生田氏が捉えた伝承現場での子どもの生き生き



神楽に釘付け（上椎葉神楽）

とした姿によって、伝承地域の将来の担い手を育てる社会装置としての民俗芸能が子ども達にとっても非常に魅力的であることが見て取れます。

なお、本研究はJSPS科研費 JP16K01645の助成を受けたものです。

注

- *1 宮崎県内には国の重要無形民俗文化財(国指定)となっている夜神楽が4つある。銀鏡神楽は「米良神楽」として単独指定されているが、高千穂町内に伝承されている約30の夜神楽が「高千穂の夜神楽」として、椎葉村内に伝承されている約26の夜神楽が「椎葉神楽」として、高原町に伝承されている2つの夜神楽が「高原の神舞」として、それぞれ集団指定されている。現在、米良山中に伝承されている西米良神楽、尾八重神楽、中之又神楽が記録作成等の措置を講ずべき無形民俗文化財(国選択)に指定され、国指定に向けた調査が始まっているため、銀鏡神楽も集団指定になる可能性が高い。
- *2 参考文献9. 参照
- *3 参考文献9. 30頁
- *4 参考文献10. 参照
- *5 参考文献10. 55頁
- *6 参考文献11. 参照

引用・参考文献

1. 中央教育審議会「新しい時代を拓く心をそだてるために」答申(1998年6月30日), http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chuuou/toushin/980601.htm#1-4, 2017年9月18日参照
2. 文部科学省「小学校学習指導要領」明治図書, 1998
3. 文部科学省「小学校学習指導要領 体育編」東洋館出版社, 2008
4. 文部科学省「小学校学習指導要領」東京書籍, 2017
5. 「平成29年告示 幼稚園教育要領 保育所保育指針 幼保連携型認定こども園教育・保育要領(原本)」チャイルド本社, 2017
6. 柏木利恵子「学校教育における民俗芸能の伝承について—遠野郷しし踊り—」『比較舞踊研究』2巻1号, 比較舞踊学会, 1996, pp.38~53
7. 卯田卓矢「小学校における民俗芸能の継承活動と学校統廃合 —岩手県一関市を事例として—」『日本地理学会発表要旨集』2016
8. 森下春枝「幼少期における民俗芸能の活用 —子どもの心と身体を育てるアプローチとして—」青山学院女子短期大学『総合文化研究所年報』第19号, 2011, pp.21~32
9. 佐々木昌代, 根上優「神楽伝承における後継者育成の仕組みと課題 —銀鏡神楽と尾八重神楽から—」宮崎大学生涯学習教育研究センター紀要『生涯学習研究』第8号, 2003, pp.23~36
10. 佐々木昌代, 根上優「太鼓踊の伝承と課題 —えびの市飯野麓輪太鼓踊に関する事例研究—」宮崎大学生涯学習教育研究センター紀要『生涯学習研究』第9号, 2004, pp.47~57
11. 佐々木昌代「宮崎県内における夜神楽の後継者育成の仕組みに関する調査研究」(平成16~18年度科学研究費補助金(基盤研究C2)研究成果報告書)2007
12. 生田久美子『コレクション認知科学6「わざ」から知る』東京大学出版会, 2007